

研究課題	持続可能な社会(E S D)の創り手としての子どもの資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントとICT活用
副題	
キーワード	E S D キャリア教育 7つの力 Well-being
学校/団体名	公立熊本市立北部中学校
所在地	〒861-5521 熊本県熊本市北区鹿子木町1番地
ホームページ	<a href="http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/link/schoollink/jh_link.html">http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/link/schoollink/jh_link.html</a>

## 1. 研究の背景

現在我が国は、少子・高齢化社会の拡大、グローバル化、絶え間ない技術革新等により社会的な構造が急速に変化している。また、第5期科学技術基本計画において、情報社会に続く新たな社会として Society5.0 が示され、IoT や AI の飛躍的な進化により、超スマート社会が実現されようとしており、雇用の在り方や人々のライフスタイルにも大きな影響を与えている。このような変化が激しい新しい時代を担っていく生徒は、変化を前向きに受け止め、様々な課題に対してしなやかに対処しながら、主体的・協働的に学び、課題を解決していく力が求められる。

一方、PISA や TIMSS 調査の結果によると、日本の生徒は、成績は世界の上位層に位置しているが、「勉強が楽しい」「現在の学びが自らの将来や職業と結びついている」と認識している生徒の割合は極めて低い状況にあり、学習への興味関心の希薄さや自らの学びは将来役に立たないと考え、夢や希望が持てていない現状が浮き彫りになっている。

このような現状を踏まえ、新学習指導要領の総則において「生徒が学ぶことと自己との将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身につけていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」と明記された。また、各学校においては、学習の基盤となる資質能力(言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力)や現代的な諸課題に対して求められる資質・能力の育成のために教科等横断的な学習を充実させることや主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、カリキュラム・マネジメントに努めることも示された。本校の生徒は、自ら考え、課題解決のために工夫創造するなど実践していくことを苦手としている生徒も多く、目標をもつことができず、学校生活全体に意欲的に取り組めない生徒も見られる。

## 2. 研究の目的

そこで、本校ではE S Dを軸としたカリキュラム・マネジメントやキャリア教育・ICT教育の視点に立った授業の工夫・改善に取り組むことによって、21世紀型能力(基礎的・汎用的能力)を身に付けさせ、生徒一人一人が人や社会とつながりながら、主体的・協働的に学び、

未来を切り拓く課題解決力を持った生徒を育みたいと考え「持続可能な社会(E S D)の創り手としての子どもの資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントとICT活用」という課題を設定した。

### 3. 研究の経過

- 2018年度～2019年度 国立教育政策研究所 教育課程研究指定事業 (E S D)
- 2018年度～2019年度 熊本市教育委員会指定 教育課程
- 2020年度 九州地区進路指導・キャリア教育研究大会 (誌上・web 発表)
- 2020年度～2021年度 熊本市教育委員会指定 教育課程 (モデル校)

### 4. 代表的な実践

(1) 総合的な学習の時間を軸に、特別活動、各教科・領域をESDの視点で意図的に結び付けた横断的な教育実践(カリキュラム・マネジメント)

「持続可能な社会の構築を目指して、自立的に考え、行動する力を養う教育」を目指した、教科横断的な指導計画を整理し、教科等の指導方法等の工夫改善を行った。

#### ① 本校で育む「7つの力」の設定

文部科学省から示されたESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度とキャリア教育で身につけさせたい基礎的・汎用的能力の関係から、課題発見・課題解決能力を育み、持続可能で幸福な社会(Well-being)を創り出すために、本校で育む7つの力を設定した。「北部中学校で身に付けたい7つの力」を明確にすることにより、各教科の授業や総合的な学習において、意図的・計画的に教育活動を進めることができた。

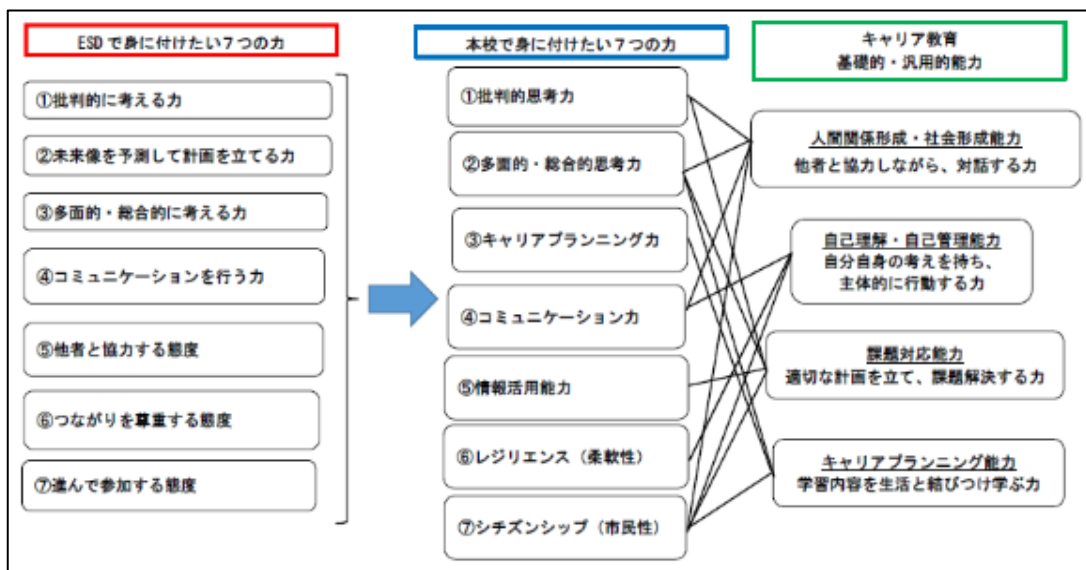


図1 ESD×キャリア教育 本校で育む7つの力

② 「ESD学びの地図」(別紙参照)

③ 総合的な学習の時間「北部SDGs」の開設

生徒会の委員会活動と連動し、生徒全員が委員会に所属し、総合的な学習の時間を使った、「北部SDGs」を開設した。ここでは、通常の委員会活動とは目的が異なり、全ての活動をSDGsの視点で見直し、課題を発見し、課題を解決する探究的な学習に取り組んでいる。また、下記に示すように以前の11委員会に加え、4つの委員会を新設した。今年度後期は、実情に合わせて13委員会に絞って探究的な活動を行っている。

＜以前の委員会＞											
学級	生活	環境	緑化	図書	安全	保健	体育	文化	給食	厚生	の11委員会
+						学習向上 NIE 統計調査 国際交流					

(2) 生徒に身につけさせたい資質・能力の育成に視点を置いた授業の工夫・改善

＜授業づくりの4つの視点＞

- |                  |               |
|------------------|---------------|
| ① 効果的な ICT 機器の活用 | ② 対話を取り入れた授業  |
| ③ NIE の活用        | ④ エキスパート人材の活用 |

※ ここでは、① ④ の実践について紹介

① 効果的な ICT 機器の活用を図った授業実践

例1 技術・家庭科2年(家庭分野)

例1は、適切な食品選択の授業である。具体的な食材を、映像で見せながら授業が進んでいく。「自らの生活をよりよくしよう」と工夫する生徒の育成」がテーマである。



写真1 授業の様子



写真2 食品選択の様子

例2 学級活動 3年『自分を知り、学習・進路選択について考えよう』

自分自身について知り、自分に合った学習や進路選択を行うとする前向きな気持ちを持つことをねらいとした授業を行った。多面的・総合的思考力を育成するために「強み・弱み・機会・脅威」の4つの視点から自分自身の内部環境・外部環境について分析することができる「SWOT分析」を用いた。



写真3 SWOT分析画面

現在の自分の課題について考え、実践していく力について探求した。様々な分析方法を活用する手法が情報活用能力の育成にもつながる。また、意見の共有・比較の場面では、タブレットや電子黒板を使用することで視覚的に違いが分かるように工夫した。



写真4 SWOT分析をしている様子

④ エキスパート人材の活用（ゲストティーチャー活用）

例1 主権者教育『ツルハタウン』を通して～まちづくりセンターとの連携～

効率と公正の両面について配慮していくという考えを生徒に体感してもらう教材として「ツルハタウン内公園整備計画」を行った。架空の都市「ツルハタウン」の中に公園を整備するという課題に対し、さまざまな住民の意見を取り入れ、合意形成を行いながら、生徒同士が意見を交わす。熊本市北区長や北部まちづくりセンター長等をゲストティーチャーとして招き、生徒にアドバイスをしてもらうことで、生徒はよりリアルな教材として感じることができた。



写真5 まちづくりセンターの方からアドバイスを受ける様子

例2 体育 オリンピック・パラリンピック事業「オリンピックの生き方から学ぶ」

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業を利用し、「オリンピック選手の生き方から学ぶ」ことを目的にオリンピック選手に講演会を行っていただいた。生徒からは、夢を持つことやポジティブ思考になること、挑戦・努力することの大切さが改めてわかったなどの感想がみられた。



写真6 講演会の様子

(3) 教育エコシステムの構築（地域・企業等との連携による課題探究学習）

※ 2例紹介

例1 1年 学年総合 熊本へ修学旅行を誘致しよう！（地域との連携）

北部中学校1年生の総合的な学習の時間では「熊本市のSDGs 修学旅行コースづくり」を行



写真7 熊本の魅力を伝えるパンフレット

った。他県中学生の修学旅行を熊本市へ誘致するため、これからの新しい修学旅行のモデルとして熊本市の魅力的な観光地や史跡、名所、名産品、郷土料理などをSDGsの視点で位置付けた。まとめとして、発信用パンフレットづくりを行った。

## 例2 メルカリと連携した授業「Project2040～20年後のビジネスモデルを考えよう～」

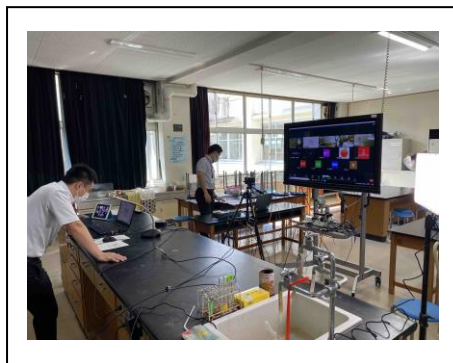
「北部SDGs」の1コース、学級委員会で、株式会社メルカリと連携し、「20年後のビジネスモデルを考えよう」をテーマに課題解決型学習プログラム(PBL)に取り組んだ。これまでの価値交換の変遷や現在のビジネスやサービスなどを学び、20年後の未来は、どのようなビジネスやサービスがあったらよりよい社会になるのかをグループワークを通して議論し、プレゼンテーションを行った。普段学校の授業において経済の仕組みやビジネスについて考える機会がほとんどない生徒たちにとって、社会の課題を自分事として考え、解決しようとする力を身につけることができる大変意義深い学びとなった。



写真8 ビジネスモデル発表会の様子(遠隔授業)

## (4) コロナ禍において、学びを止めない授業実践の工夫

コロナ禍においても、生徒の学びを止めないよう、昨年度の休業期間より、本校ではいち早く遠隔授業を計画・実践してきた。当初より、パソコン等の機材の切り替え機を借りる(→今回の助成で購入した)ことで、各教科の遠隔授業のスムーズな対応ができた。



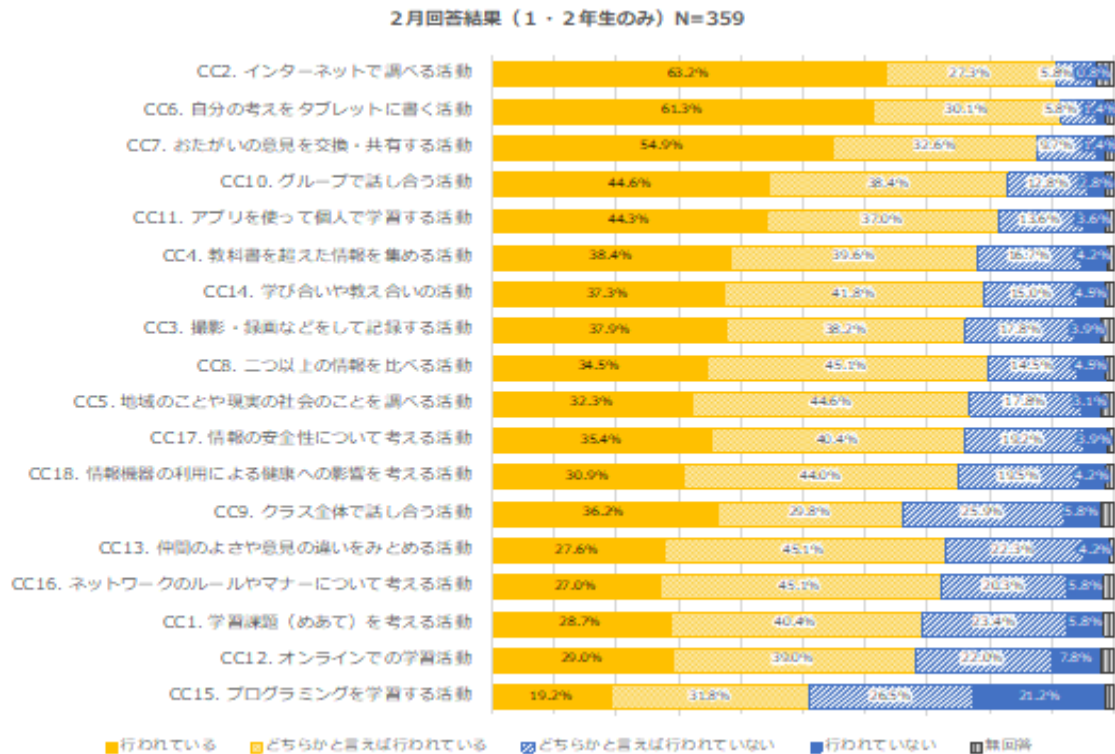
## 5. 研究の成果

- 縦割りで「総合的な学習の時間」のコース別の活動、及び、各学年での「総合的な学習の時間」を、ESD×キャリア教育×ICT教育の視点に立った授業(活動)を構築できた。  
→これらの活動により、21世紀型能力(基礎的・汎用的能力)を身に付け、生徒一人一人

が人や社会とつながりながら、主体的・協働的に学び、未来を切り拓く課題解決力を持った生徒を育成することができた。

- 3年前より行ってきたICT教育の先行導入による取り組みを、さらに発展させ、生徒の日常的な活動として定着することができた。
  - コロナ禍に於いても、学びを止めない実践ができた。
  - 早稲田大学の協力により、ICT活用の現状等を評価して、その結果を生徒・教師ともに再考することができた。

以下に示すのは、第2回目の評価を分析していただいた結果の一部である。



## 6. 今後の課題・展望

- 信頼性・妥当性のある評価の構築を目指して、「ルーブリック評価」の精度を高めていく。
- ESDカレンダーやESD学びの地図を作成したことで、教科横断的な指導は分かりやすくなったが、各教科での身に付けさせたい力の検討・実践にやや課題が残った。
- 総合的な学習の時間に位置付けた委員会活動だが、それぞれが探究となる学習活動を全委員会（全職員）で構築していく難しさがある。
- 総合的な学習の時間と各教科等の横断的なつながりを再考し、「ESD学びの地図」のバージョンアップ図り、資料もweb上で閲覧できるようにし、活用できるものとする。

## 7. おわりに

本研究によって、本校でこれまで行ってきた取り組みをブラッシュアップすることができた。生徒、教職員、双方の意欲を掻き立て、楽しむことのできる仕組みを学校に作ることで、これからのよりよい未来を切り拓く生徒の育成のための学校づくりに邁進していきたい。